２０２４年（令和６年）　２月２８日　水曜日
デーリー東北　１０面　掲載

八学大短大部インドネシア留学生 地域住民と

鍋を囲んで異文化交流

南部

南部町の「cafe&smoke南部どき」で22日、八戸学院大短期大学部のインドネシア人留学生と地域住民が鍋料理を囲んで交流するイベントが開かれた。同店2階を拠点に活動するNPO法人「学びどき」（根市大樹理事長）が企画。料理はイスラム教の戒律に従った「ハラル」メニューが提供され、互いの文化について理解を深めた。（上條哲洋）

食事をしながら交流を深めるインドネシア人留学生と参加者

NPO企画「ハラル」料理提供

留学生はいずれも介護福祉学科1年生で、ユリアニ・ヌルル・ナジュミーさん(19)、アンドリアニ・イスナ・アグスティナさん(20)、リゼラ・エファさん(20)、フトナ・リダビンタンさん(20)の4人。インドネシアの高校を卒業後、仙台育英高（仙台市）へ編入し、同大短期大学部に一般入試で合格して入学した。

インドネシアやハラルについて解説するインドネシア人留学生たち

同大によると、留学生は大学の勉強やアルバイトが忙しく、一般の人と交流する機会は貴重だという。南部町内では農家民泊でハラルの対応を進めていることもあり、学びどきが提案する形で交流イベントが実現した。

当日は南部町周辺から約10人が参加。まず4人がインドネシアの文化やハラルについて解説し、お祈りやラマダン（断食月）などについて質問を受けた。

続いて、地元のフードコーディネーターが調理したサムゲタンとナシゴレン、4人が調理したインドネシアの郷土料理「チレン」「テンペ」が並び、参加者が味わいながら会話に花を咲かせた。

リダビンタンさんは「インドネシアの文化を知ってもらえて良かった。ハラルについても関心を持ってくれたらうれしい」と笑顔。

学びどきの大村素子事務局長は「自分自身もハラルについて知らないことが多かった。これから地域の人がハラルを日常として捉え、いろいろな人を受け入れられるようになれば」と話した。

デーリー東北新聞社提供